

老年期痴呆の精神病理 (第4報)

—— 物盗られ妄想 ——

浅野 弘毅, 近藤 等, 海老名 幸雄
菊池 陽子

はじめに

アルツハイマー型痴呆患者に出現する産出症状のうちもっとも多いのは物盗られ妄想である。

浅井ら¹⁾の12施設を対象とした調査においても、物盗られ妄想の頻度がもっとも高いと報告されている。

物盗られ妄想を有する患者は、身近で介護する者を犯人扱いすることが多いので、ケアをするうえでの困難を倍加させている。

なかには、警察その他の公共機関に訴えでる患者もいて、介護者との感情的軋轢がぬきさしならなくなる場合がある。

物盗られ妄想は、同居家族に在宅での介護に限界を感じさせ、施設入所を決断させる要因のひとつとなっている。

これまでのところ、わが国では、物盗られ妄想は圧倒的に女性に多いとされてきた。

今回は物盗られ妄想について検討を加えたので報告する。

対象と方法

対象はアルツハイマー型痴呆患者115人であるが、その属性については第1報²⁾で詳しく触れたので省略する。

方法は、入院病歴および看護記録の記載に基づいて症状の評価を行った。入院前の症状の評価については、家族の陳述に基づいている。

結 果

早発性アルツハイマー病患者26人のうちの6人、晩発性アルツハイマー病患者64人のうちの20人、混合型アルツハイマー病患者25人のうちの10人、計36人、31.3%に物盗られ妄想を認めたと(表1)。

物盗られ妄想を呈した患者の性別は、男性7人、女性29人となっている(表6)。

物盗られ妄想を呈した36例の改訂長谷川式簡易知能評価スケール(HDS-R)の得点をみたのが表2である。()のなかの数字は、施行できなかった患者の得点を0点と仮定した場合の平均得点を示している。

早発性アルツハイマー病患者では5.8点、晩発性アルツハイマー病患者では12.0点、混合型アルツハイマー病患者では10.2点となっており、平均は10.6点であった。

この得点は、人物誤認症状を呈した群(9.8点)³⁾より高く、「幻の同居人」症状を呈した群(12.6点)⁴⁾より低い傾向にあり、対象患者全例の平均(10.9点)²⁾に近い値になっている。

自宅で盗まれたもの(表3)としては、お金と財布がもっとも多く、ついで特定されたさまざまな

表1. 物盗られ妄想出現率 (%)

	全例数	物盗られ妄想出現例数
早発性アルツハイマー病	26	6 (23.1)
晩発性アルツハイマー病	64	20 (31.3)
混合型アルツハイマー病	25	10 (40.0)
	115	36 (31.3)

表 2. HDS-R 得点比較

	全 例	人物誤認	物盗られ妄想	幻の同居人
早発性アルツハイマー病	9.1 (6.3)	8.5 (5.7)	5.8 (4.8)	11.3 (8.5)
晩発性アルツハイマー病	10.7 (9.5)	9.9 (8.8)	12.0 (11.4)	12.6
混合型アルツハイマー病	12.5	10.9	10.2	14.5
平 均	10.9 (9.5)	9.8 (8.4)	10.6 (10.0)	12.6 (11.5)

表 3. 盗まれた物品一覧 (人数)

お金・財布	20
特定の物品	19
指輪・時計・カメラ・バッグ クラフトドール・着物・寝巻き タオル・杖・包丁・冷蔵庫の中味 ウイスキー・牛乳・クリーム 体温計・貰い物・墓石	
不特定の物品	14
通帳	5
印鑑	1
保険証	1
不明	2

(重複あり)

物品となっている。高価なものから廉価なものまで、身近なものから身近でないものまで、実にバラエティに富んでいることが分かる。なかには墓石が盗まれたと訴えた症例もあった。

犯人とされた人(表 4)は、名指しされたなかでは同居親族が圧倒的に多い。なかには、他人や別居親族を犯人扱いする症例もあった。

一方で、犯人を特定しない症例もかなりの割合に達している。泥棒とか知らない誰かが犯人だと述べるケースである。

ほとんどの症例では入院と同時に妄想が消失したが、一部に入院後も他の患者や泥棒に物を盗まれると訴える患者がいた。

症 例

症例 1

初診時 63 歳の女性。診断は早発性アルツハイ

表 4. 犯人とされた人 (人数)

自 宅	病 棟
同居親族 〔嫁・息子・孫〕 〔妻・母・夫〕	15
他人 〔〇〇さんのお母さん〕 〔アパートの隣人〕 〔植木屋・檀家〕 〔近所の人・友人〕	6
泥棒	6
別居親族 〔養子夫婦・妹・姪〕 〔息子夫婦・娘〕	5
不明	12
他患	2
泥棒	1
不明	1

(重複あり)

マー病。

〔生活史〕

高校卒業後、24 歳で結婚し、3 人の子どもをもうけた。40 代で夫と死別、実の両親と同居していたが、60 歳の時に実父と死別したため、実母との 2 人暮らしになった。

〔病前性格〕

活発、社交的で大胆な半面、几帳面、神経質でもある。

〔現病歴〕

60 歳ころから徐々に物忘れが進行した。一年後には物忘れが著明となり、新しいことが覚えられなくなり、物を置き忘れたり、紛失しては母親が盗ったと攻撃するようになった。漢字も書けなく

なり、炊事にも意欲を示さなくなった。63歳の時、当センターを初診した。

〔入院後の経過〕

困惑状態で病棟内を徘徊、見当識障害、着衣失行を認める。家人の面会や自宅への電話を直後には忘れてしまう。その一方で「失礼なことばかり申し上げて……。」などの言葉をくり返し、表面的に取り繕う態度が目立った。入院後は物盗られ妄想の訴えはなかった。

〔検査所見〕

HDS-R（改訂長谷川式簡易知能評価スケール）の得点は4点、MMSは8点、N式は21点で、痴呆のレベルは高度である。

頭部MRIにて両側頭頂葉および側頭葉優位のびまん性脳萎縮を認め、SPECTにて両側前頭葉・側頭葉に血流の低下を認めた。

症例2

初診時72歳の女性。診断は晩発性アルツハイマー病。

〔生活史〕

旧制の高等女学校および女子学園の専攻科2年を卒業後、22歳で結婚し、3人の子どもをもうけた。長男一家と同居していたが、72歳の時に夫と死別した。

〔病前性格〕

内向的で、几帳面、熱中性で完璧主義である。

〔現病歴〕

67歳頃より意欲の低下が出現し、次第に健忘も加わったため、69歳の時、某大学病院精神科を受診した。記憶障害軽度で「うつ病」と診断され、抗うつ薬を服用したところ健忘症状はいったん改善した。

72歳で夫を亡くしてからは、茫然としていることが多くなり、物忘れが増悪した。次第に物を紛失しては誰かが盗るというようになり、夜間せん妄も加わったため、大学病院からの紹介で当センターを初診した。

〔入院後の経過〕

入院している自覚が失われており、主治医の声かけに「どうして私をご存じなんですか」と応じ

る。帰宅要求を口にしながら上機嫌で「毎日、明日（帰る）、明日（帰る）、と言いながら居るんですよ、ホホホホ」などと笑っている。

入院後も自分の持ち物が誰かに盗まれると言いながら、病棟内をセカセカと探し回る。入院後夜間せん妄は見られなかった。

〔検査所見〕

HDS-Rの得点は21点、MMSは18点、N式は75点で、痴呆のレベルは軽度である。

頭部CT、MRIで軽度びまん性の脳萎縮、SPECTにて両側前頭葉・側頭葉・頭頂葉の血流低下を認めた。

症例3（外来症例）

初診時76歳の女性。診断は早発性アルツハイマー病。

〔生活史〕

女学校のあと青年教員養成所を卒業し、22歳で結婚するまで青年学校で教鞭をとった。

子どもを4人もうけたが、そのうち2人を幼児期に失っている。20年前に夫と死別した。

〔病前性格〕

わがままでプライドが高くおしゃべり。

〔現病歴〕

14年前に同居する長男（末子）が結婚した。本人は最初から結婚に反対していた。その頃から、物がなくなると嫁が盗ると言い出した。鍋を焦がしたり、釣銭の計算も出来なくなった。

物盗られ妄想による嫁への攻撃がひどいため、長男夫婦は一時家を出て別居したこともある。嫁の顔を見ると「泥棒!」「出ていけ!」「雌猫!」と大騒ぎをするため、嫁は姿を見せないようにして暮らしている。76歳の時、当センターを初診した。

〔検査所見〕

HDS-Rの得点は18点、短期記憶の障害、時間的失見当、着衣失行などを認めたが、痴呆のレベルは軽度である。

頭部CTおよびMRIはびまん性脳萎縮の所見であった。

考 察

1. 物盗られ妄想の出現率

われわれの対象患者における出現率とこれまでの報告⁵⁻¹⁴⁾とを比較してみた(表5)。

もっとも低い値は Förstl ら¹⁰⁾の1.8%で、もっとも高い値は Hwang¹⁴⁾の55.6%となっている。この2つを除いた報告の平均値は25.0%である。

われわれの対象患者における出現率は、諸外国の報告に比較して高く、わが国の報告のなかでは低くなっている。

2. 物盗られ妄想出現率の性差

われわれの対象患者の性別は、男性7人、女性29人であった。単純にこれだけを比較すると、圧倒的に女性に多いということになる。

わが国では、女性に圧倒的に多いという印象を諸家がこれまで述べている。

しかしながら、アルツハイマー型痴呆自体が女性に多い疾病なので、そのことを考慮に入れる必要がある。

多くの論文は血管性痴呆とアルツハイマー型痴呆とを区別していなかったり、性別の記載がないため、正確な値を知ることができるものはきわめて少ない。ここでは目にしえた範囲の報告をもとに表を作成した(表6)。

Burns ら⁸⁾は男性38人のうちの7人、女性140人のうちの9人に物盗られ妄想が見られたと報告

表5. 物盗られ妄想出現率の比較

報告者	全例数	出現率 (%)
Reisberg ら (1987)	57	28.1
Rubin ら (1988)	110	26.4
Mendez ら (1990)	217	10.6
Burns ら (1990)	178	9.0
Jeste ら (1992)	107	22.4
Förstl ら (1994)	56	1.8
Patterson ら (1994)	221	16.3
木戸 (1995)	74	43.2
小澤 (1997)	73	46.7
Hwang (1997)	54	55.6
浅野 (1999)	115	31.3

表6. 物盗られ妄想出現率の性差

報告者	男性:女性
Burns ら (1990)	2.9:1 (7/38:9/140)
小澤 (1997)	1:3.1 (3/17:32/56)
浅野 (1999)	1:1.5 (7/31:29/84)

している。性差は2.9対1ということになる。

一方、小澤¹³⁾は、男性17人のうちの3人、女性56人のうちの32人に物盗られ妄想が出現したと報告しており、性差は1対3.1となっている。

われわれの対象患者における性差は1対1.5ということになり、これまで言われてきたほど性差のないことに気づかされる。

3. 物盗られ妄想の精神力動

物盗られ妄想の背後に隠されている精神力動について、すでにいくつかの見解がある。

室伏¹⁵⁾は、物盗られ妄想、苛められ妄想、捨てられ妄想、嫉妬妄想(自分が頼りにしている人を盗られる)を一括して喪失妄想と呼んだ。

そのうえで「自分があてにし頼りにしていたものがなくなる不安が、老人の生きていけるかいけないかの不安に合致」していると述べ、喪失感あるいは「存在不安」に焦点をあてている。

一方、竹中^{16,17)}は、物盗られ妄想の臨床的特徴として、(1)記憶障害が関係していることが多いが、痴呆や健忘が絶対的な条件ではない、(2)盗られたと即断する、(3)「被害」に比して訴えが大仰である、(4)特定の「犯人」がいる、(5)「犯人」に対する攻撃性が顕著、(6)訂正不能な確信、の6点をあげている。

そして、物盗られ妄想は、被害を被ったという形をとった敵意あるいは攻撃性であると指摘している¹⁷⁾。

それに対して、小澤¹⁸⁾は、痴呆性高齢者は喪失感と依存の狭間で揺れ動いており、介護者に対する両価感情が攻撃性を生むと分析している。

ところで、症例1のように、終始特定の家族を犯人扱いする群と、症例2のように犯人が特定さ

れず拡散していく群とのあいだには、精神力動に違いのあることが想定される。

小澤¹⁸⁾は物盗られ妄想に2つの亜型を区別した。すなわち、攻撃性が前景に出る亜型と喪失感が前景に出る亜型である。そのうえで、この2つの亜型を分けるのは病前性格の違い、とくに精力性の程度によるとしている。

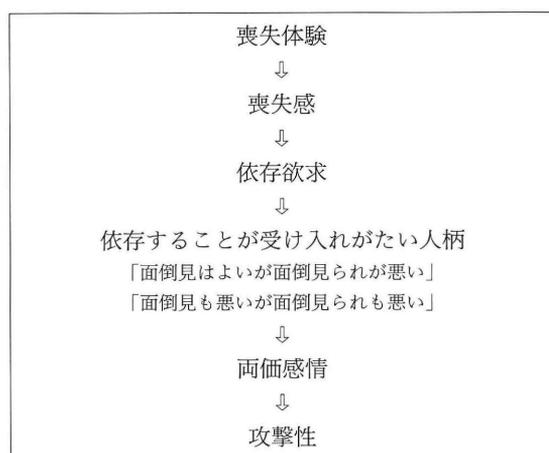
われわれの対象患者のうち、特定の家族を犯人扱いする群は、小澤のいう攻撃性が前景に出る亜型に相当し、犯人が特定されず拡散していく群は、喪失感が前景に出る亜型に相当する。

小澤は、攻撃性が前景に出る亜型の精神力動を図のように説明している。すなわち、喪失体験→喪失感→依存欲求→依存することが受け入れがたい人柄（「面倒見はよいが面倒見られが悪い」あるいは「面倒見も悪いが面倒見られも悪い」）→両価感情→攻撃性という順序が妄想生成過程を構成するというのである。

そして、患者は「心的力動としてみれば依存欲求と依存拒否という両価感情によって、心的構造としては心的力動の出発点となった喪失感と終着点となった攻撃性との狭間で引き裂かれながら妄想にたどり着いている」と考察している。

4. 精神力動を異にする1亜型の追加

ところで、症例3の精神力動は、これまで述べてきた2群とは様相を異にしている。



(小澤, 1998, より著者作成)

図. 物盗られ妄想の精神力動

表7. 物盗られ妄想の亜型

- | |
|---------------------|
| I. 攻撃性が前景に出る亜型 |
| ・ 依存することが受け入れがたい人柄 |
| ・ 盗まれた物=息子を取り返したい願望 |
| II. 喪失感が前景に出る亜型 |

本症例の物盗られ妄想では、同居する嫁に対する激しい攻撃性が認められるが、それが盗まれた息子を取り返したいという欲求に基づいていることがあからさまに見て取れる。

ここで、攻撃性が前景に出る亜型に、さらに一亜型を追加することが可能となる。すなわち、盗まれた物=息子を取り返したいという願望に起因する物盗られ妄想の一群が存在するというのである(表7)。

われわれの対象患者のなかにも、類似の願望が読み取れる症例が含まれていたが、症例3ほど極端な表現をする症例がなかったので、あえてわれわれの対象患者には含まれていない外来症例を呈示した。

この亜型こそが、母と息子をめぐりきわめて日本的な心性を象徴的に表現している。

アルツハイマー型痴呆の女性患者の精神病理が、はからずもわが国の嫁-姑関係の基底に横たわる深層を露にしている。

ま と め

アルツハイマー型痴呆患者によく出現する物盗られ妄想について報告した。

1. 物盗られ妄想の出現頻度は、対象患者115人中36人で、出現率は31.3%であった。

2. 改訂長谷川式簡易知能評価スケールの平均得点は10.6点であった。この得点は人物誤認症状を呈した群より高く、「幻の同居人」症状を呈した群より低く、対象患者全例の平均得点に近かった。

3. 性差は男性1に対し女性1.5で、これまで言われてきた程、極端に女性に多いわけではないことが判明した。

4. 盗まれた物としては、お金と財布がもっとも多く、同居親族が犯人とされる傾向が強かった。

5. ほとんどの症例で入院と同時に妄想が消失したが、一部に入院後も他の患者から物を盗まれると訴える患者がいた。

6. 特定の家族を犯人扱いする群すなわち攻撃性が前景に出る亜型と、犯人が特定されず拡散していく群すなわち喪失感が前景に出る亜型とに分けられた。

7. 攻撃性が前景に出る亜型は、さらに、依存することが受け入れがたい人柄に起因する群と盗まれた息子を取り返したい願望に起因する群とに分けることができた。

[本論文の要旨は、第55回東北精神神経学会総会(2001年10月7日、仙台市)において発表した]

文 献

- 1) 浅井昌弘 他: 老年期の幻覚・妄想状態. 臨床精神医学 **11**: 581-587, 1982
- 2) 浅野弘毅 他: 老年期痴呆の精神病理(第1報) - 産出症状の出現率 -. 仙台市立病院医誌 **19**: 15-22, 1999
- 3) 浅野弘毅 他: 老年期痴呆の精神病理(第2報) - 人物誤認症状 -. 仙台市立病院医誌 **20**: 3-10, 2000
- 4) 浅野弘毅 他: 老年期痴呆の精神病理(第3報) - 「幻の同居人」症状 -. 仙台市立病院医誌 **21**: 3-8, 2001
- 5) Reisberg B et al: Behavioral symptoms in Alzheimer's disease; Phenomenology and treatment. J Clin Psychiatry **48**: 9-15, 1987
- 6) Rubin EH et al: The nature of psychotic symptoms in senile dementia of the Alzheimer type. J Geriatr Psychiatry Neurol **1**: 16-20, 1988
- 7) Mendez MF et al: Psychiatric symptoms associated with Alzheimer's disease. J Neuropsychiatry Clin Neurosci **2**: 28-33, 1990
- 8) Burns A et al: Psychiatric phenomena in Alzheimer's disease. Br J Psychiatry **157**: 72-94, 1990
- 9) Jeste DV et al: Cognitive deficits of patients with Alzheimer's disease with and without delusions. Am J Psychiatry **149**: 184-189, 1992
- 10) Förstl H et al: Neuropathological correlates of psychotic phenomena in confirmed Alzheimer's disease. Br J Psychiatry **165**: 53-59, 1994
- 11) Patterson MB et al: Assessment of behavioral symptoms in Alzheimer disease. Alzheimer Disease and Associated Disorders **8** (suppl 3): 4-20, 1994
- 12) 木戸又三: 老年期痴呆の人物誤認症候群, 特に“家の中に誰か他人がいる”と想像する1群について. 臨床精神医学 **24**: 1439-1446, 1995
- 13) 小澤 勲: 痴呆老人にみられるもの盗られ妄想について (1) 性別・疾病診断別随伴率と痴呆の時期による病態の違い. 精神経誌 **99**: 370-388, 1997
- 14) Hwang J-P et al: Delusions of theft in dementia of the Alzheimer type; A preliminary report. Alzheimer Disease and Associated Disorders **11**: 110-112, 1997
- 15) 室伏君士 編: 老年期精神障害の臨床. 金剛出版, 東京, 1987
- 16) 竹中星郎: 老年期痴呆の周辺症状 - 妄想・幻覚 -. 老年精神医学雑誌 **5**: 165-170, 1994
- 17) 竹中星郎: 老年精神科の臨床 - 老いの心への理解とかかわり -. 岩崎学術出版社, 東京, 1996
- 18) 小澤 勲: 痴呆老人からみた世界 - 老年期痴呆の精神病理 -. 岩崎学術出版社, 東京, 1998